

『日本海軍は、苦境の後半戦をいかに戦い続けたか』

## 総集篇の第一部

日本軍がコロ島とベラ・ラベラ撤収作戦を成功させ、米側も日本軍の戦術的勝利と判定したこの一九四三年十月の戦いは、開戦からほぼ一年十カ月目であり、山本五十六が約束した「一年くらいは暴れてみせるがそれから先は保証できない」という時期をすでに遠く過ぎていました。

実態としても、これまで辛うじて健闘してきた零戦隊に加えて、駆逐艦隊までが極度に消耗していて、続々と新戦力を投入してくる連合軍部隊に対抗できる状況ではなくなっていました。まさしく山本長官の予言通りの推移です。しかもここまでの詳細な検証により、大苦戦の一因が軍中枢部の不適切な基本戦略に由来している事実も判明しました。

航空機生産の陸海同数の固執、駆逐艦隊の酷使、内容空疎な絶対国防圏構想などは、ただ徒に前線将兵の戦力を消耗するだけでした。

それでも中央が終戦を決断しない限り前線の将兵は戦い続けなければなりません。この時期から終戦までが同じく一年十カ月。その道程は、前半戦よりもさらに一段と厳しく深刻なものがありました。

一方、米軍を主体とした連合軍は、桁違いに豊富な生産力をフル活動させて、質・量共に日本軍を遥かに上回る航空機を増産し、空母、駆逐艦、潜水艦を猛烈な勢いで建造してきました。

駆逐艦に限ってみても、すでに開戦の翌年の一九四二年には正規駆逐艦83隻、その翌年の一九四三年には、正規で123隻、簡素化して建造を急いだ護衛駆逐艦の216隻が新たに戦線に参加しています。

これらの数字を見ても、米海軍がすでに開戦以前から、事前に日本海軍の戦力を十分に調査し、その対応策を進めていたことがよく分かるのですが、一方の日本軍は、殆どの分野で空疎なスローガンを並べるに止まり、効果的な対策は遅々として進まない状況だったのです。

洋上飛行不能という陸軍機の基本的欠陥は、もともと早い段階で気付くべきでした。対米戦争に踏み切る決断をする以上、当然航空隊の洋上飛行は不可欠の能力です。事前の度重なる会議で、この事実が議題にもなっていないのがむしろ謎です。おそらくは「横暴米英討つべし」という開戦決定前後の全体の熱気が、冷静な判断力を覆い隠してしまったのでしょう。これは国民性全体にも及ぶ基本問題でした。

この結果、天王山のこの時期、最も取り返しのできない大損害を受けたのは、実はニューギニアの陸軍でした。まず陸軍航空隊は到着するま

でに大半が洋上で失われました。辛うじて到着できた少数機も、連合軍偵察隊が事前に探知し、到着と同時に奇襲攻撃をかけ、到着機は迎撃の余裕もないうちに壊滅しました。これは明らかな徒死です。

推定死者約十二万人、殆どが餓死ないし病死。確認された生存者一万余人のうち内地帰還を果たした者、辛うじて一万人。

彼我の戦力についての基本的な知識が皆無という状況のもとで行われた無謀な作戦であり、むしろ集団自殺に近い悲惨な戦いでした。

この点では、海軍が「松」型という簡易駆逐艦の建造に踏み切っていたのはむしろ称賛すべきものでしょう。これは米海軍が全く逆の発想に基づいて開戦直前にフレッチャー型駆逐艦の量産に踏み切っていたことでも証明されます。米海軍は戦前に日本の陽炎型を見て、急遽建艦計画を変更してフレッチャー型の量産を開始。これが昭和十七年から十九年に結実。その後さらにベストシップと呼ばれる夕雲を知り、至急量産を開始したのがサムナー型とギャリング型。これは昭和十九年と二十年に戦列に参加し、質において日本を追い、量において遥かに日本を凌駕しつつありました。

そのころには全体の建造能力を失いつつあった日本海軍は、一転して簡易型に切り替えていたのです。わが駆逐艦隊は終戦に至るまで、個々の艦の能力だけでなく、戦略的な思想においても世界のトップを維持し続けていました。（致命的だったのは量産能力不足）

これは終戦後に英海軍が中心となり、米海軍関係者が加わった調査団の報告書によっても明らかにされました。報告書の結論。

「日本海軍は過去二十年間、あらゆる努力を傾けて研究した結果、世界に比類ない魚雷を発明し、これを実用していた」

その誇りを振り切つて、今や日本海軍は「松」型の量産を開始しました。全体の設計を簡素化して建造期間を短縮すること、建造単価を抑えて建造数を増やすこと、猛威を示し始めた敵の潜水艦を爆破する爆雷機能の強化などに重点を置き、駆逐艦の最大の生命とも言える艦速を敢えて二十八ノット以下に抑えた設計でした。

「松」の着工が始まった昭和十八年の七月は、正にソロモン戦が中部地区に移り、わが前進飛行場のムンダをめぐつての日米攻防戦の死闘が展開されていた時期でした。

ムンダ飛行場は、日本軍の建設能力が劣弱なため、短い滑走路一本しかなく、防衛のための零戦が常駐できません。

そこで困った時の陸戦隊で、大田少将の八連特が防空隊を組織して防空御に当たることになりました。これが予想外の成果を挙げたのです。

松浪少尉によれば、彼らの戦果は目覚ましく、二月九日から二十八日までの累計の敵機撃墜数は82機に達したとの記録が残っています。

最高は二月十五日の一日十四機。固定した陣地からの砲撃または機銃攻撃は意外に効果があったのです。ただしこれは継続しませんでした。松浪氏は述べていませんが、その後米軍は重爆撃機による空襲と陸上からの砲撃に切替え、大田隊の出番は消滅してしまつたからです。

次に米豪軍は予定の兵糧攻めを強化しました。それには航空攻撃と並んで潜水艦攻撃が有効でした。本来ならば日本軍は駆逐艦隊によつてそれに對抗すべきでしたが、情勢が緊迫して駆逐艦自体を輸送手段とするに至つて、深刻な駆逐艦不足が露呈してしまいました。

本来駆逐艦には多様な任務が求められています。海戦において、先陣を切つての突撃隊的な役割任務に加え、輸送船団護衛の任務、撃沈された味方艦船の救助、敵潜水艦への爆雷攻撃などの多彩な支援任務です。

護衛任務では、開戦当初はそのために海防艦が新設され、これに各種の老朽艦の転用が加わり、さらに遠洋漁業の設備と能力のある漁船に由来する艦など、各種多様な艦が動員されましたが、とても足りるものではありませんし、何と言つても駆逐艦に優る艦は存在しません。

一方の米海軍は、すでにこの時期には歩兵用のLCI、戦車用のLCTに加えて、三千トン以上の輸送能力を持つ上陸用のLSIを開発していました。最新兵器の開発能力、工業化能力では明らかに各段の大差があります。以前述べましたように、その背後には戦時に急増産した商船隊を併せて二万隻に達する大輸送船団が控えています。輸送の総合能力が抜きん出ているばかりか、敵（日本軍輸送隊）を倒す海軍全体の総合戦力はすでに防御至難な実力に達していたのです。

もはや頼みは駆逐艦だけです。その艦速は比類なく、その魚雷の火力は他のどの艦種よりも大容量です。試みに他の大型艦と比較しますと、

（主な戦艦主砲の炸薬量。駆逐艦は陽炎型の魚雷で490キロ）

戦艦大和 330キロ

同 長門 224キロ

同 金剛 136キロ

（重巡 軽巡の主砲は右以下。ただし九三式魚雷を装備しているので、それを使用した場合は駆逐艦並み）

駆逐艦の最強の武器は魚雷の破壊力です。

自艦よりも遙かに強大な戦艦と遭遇しても、その弾幕をくぐって接近し、九三式酸素魚雷を叩き込むことができれば、一瞬にして攻守は逆転し、大敵を海の藻屑とすることが可能です。

駆逐艦乗りは、その喜びの日を夢に見て、狭隘な生活環境に耐え、薄氷を踏む恐怖を克服しつつ戦いを続ける能力を備えているのです。

どうやらその彼らに、最後のご奉公の場が与えられたようです。

現地で連続して苦戦を続ける彼らに、米軍兵士のように優雅な戦場が待ち受けているなど、あり得るはずがありません。せめて無意味な戦死だけは御免だ、というのがすべての駆逐艦将兵の本音だったのです。

名付けて雑木林艦隊。小型、低速、低コスト、短納期

終戦前年の昭和十九年四月に第一艦の「松」が竣工し、次いで翌月に後続の十隻が竣工したこの型は、それでも終戦までに三十二隻が誕生。すべて植物名だったため、略称を雑木林艦隊と呼ばれ、伊集院松治大佐と同じように、戦後もほとんどの海軍戦史から無視され続けましたが、実は最終手段に近い、切り札的な存在だったのです。

その理由の一つは、初期の十一隻はとにかく実戦に間に合って、比島沖海戦では重要な戦力となったものの、残りの二十一隻は終戦近い混乱の中で、竣工が遅れ、辛うじて最終艦の完成が終戦間近の六月となり、最終的には二十一隻が終戦待機となっていたことによります。

この松型駆逐艦は、トン数は1530トンと、いわゆる二等駆逐艦程度で、一等駆逐艦が2500トン前後であるのに比較すると、艦速、魚雷の数と能力など、わが海軍が誇る部分のすべてが劣ります。

魚雷は4連装1基と魚雷4本のみ。対潜用爆雷は36個。二十八ノットの低速で、米軍駆逐艦隊と遭遇しての決戦となった場合、著しく不利となるのは当然の帰結です。

しかしそれだけの犠牲を払う価値はありました。歴史群像編集部が平成十九年十一月に出版した「日本海軍」に、斎藤義朗氏が艦種別の建造期間を比較していますので、これを転載します。

それによりますと、

空母翔鶴 1336日（同等艦を建造するとしての子想日数）

同大鳳級 972日（右に同じ）

駆逐艦陽炎 795日( )

同「松」 326日(竣工昭和十九年四月。実績日数)

(ただし斎藤氏が起工日を昭和十九年八月八日と記述しているのは、竣工日と矛盾しますので、竣工日は駆逐艦物語に合わせ、起工日を昭和十八年七月と訂正すべきです。実はこの日時は重要な意味を持っているからです)

月単位で換算すれば約十一月弱。一九四三年十月の天王山から逆算すれば、ソロモン戦の前半で、まだ日本海軍が米海軍と拮抗して戦っていた時期です。もしこの時期に「松」型駆逐艦の発想が実行されていたならば、最終結果はともかく、戦いの様相は大きく変貌していたのは確かでしょう。

そこで歴史の検証においては、しばしば禁じ手とされる「もし、ならば」を敢えて適用して見ることにしますと、その結果はやはり驚くしかない結果に導くことになりました。

少なくともそれは、海軍通という某氏が概括したような「ひたすら負け」の戦いで終わらなかつたのは確かです。

「松」型駆逐艦には建造期間短縮以外に、さらにもう一つの利点がありました。建造単価の大幅な引き下げです。

やはり斎藤氏の試算数字を引用しましょう。

(これには実績数字と、事前の見積り数字があります)

戦艦大和	2億8153万円(同型艦としての見積り数字)
巡洋艦阿賀野	4838万円(8520トン、右に同じ)
空母雲龍	9344万円(1万7250トン、実績数字)
駆逐艦秋月	1782万円(2980トン、右に同じ)
同 松	961万円(1530トン、 )

「松」は簡易化された空母雲龍のさらに十分の一のコストです。

日本海軍は、空母については完全にタイミングを失っていました。量産型の大量建造を目指し、一九四二年八月以降、雲龍を第一艦にして計六艦を逐次着工し、雲龍等二隻だけが竣工し稼働しましたが、すでに時遅く、雲龍は稼働早々に撃沈され、僅か四カ月の薄命。第三艦の葛城が引き揚げ船に改造されて戦後にご奉公した以外の四隻は、すべて稼働に至らずに終わりました。建造期間の長さが最大の難関だったので。

それに較べて「松」型は十一月という建造期間が最大の利点であるのに加えて、コストも格安です。試算してみると、雲龍型空母六隻の建造を断念しておれば、総予算は約五億六千万円が浮きます。「松」ならば五十八隻分。しかもすべてが就役できる時間がありました。

この戦争を通じて、多くの「もし、たらば」がありました。これはその中で最大のものと言えるかもしれません。

これによって戦局を一転して「勝てる」とまで言うのは妄想に過ぎません。ここで求められているのは、「最善の戦い」です。その点では各種艦艇のうち、「松」型駆逐艦だけが総合点で辛うじて合格ラインに到達する可能性があったのです。

すでにわたしたちは、戦後の日本海軍研究者が空母、戦艦について語る人が多い一方、伊集院松治大佐のような重要人物を看過してきた事実気付いたばかりです。それは「松」型駆逐艦についても同様な状況だったのです。

このことは、戦後の研究者たちが、自らが「大艦巨砲主義」や「日本海海戦神話に呪縛されてしまった事実を証明しています。

今回はここに焦点を置いて、実質価値のある「もし、たらば」を追求することで、天王山以降の日本海軍の戦いについての再検討を行いたいと思います。

——次に続く